



Data

監督: 馮小剛 (フォン・シャオガン)
 出演: 張涵予 (チャン・ハンユー) / 鄧超 (ドン・チャオ) / 袁文康 (ユエン・ウェンカン) / 湯 (女燕) (タン・ヤン) / 廖凡 (リアオ・ファン) / 王宝強 (ワン・バオチアン) / 任泉 (レン・チュアン) / 胡軍 (フー・ジュン)

👁️👁️ みどころ

お正月映画の常連で軽妙なタッチが持ち味の馮小剛 (フォン・シャオガン) 監督が、はじめてリアルな戦争映画に挑戦!

ラッパに始まり、ラッパに終わる構成の見事さと、俳優陣の熱演に注目! ただし、17億円の製作費の大半は前半で費消。後半は、激戦の中ただ1人生き残った連隊長の、戦死した47名を革命烈士と認めさせ、その遺体を探す執念がテーマ。

したがって、後半は馮小剛監督得意の人情モノ、感動モノに転調するが、ネット上には一部反対論も……。さて、あなたの評価は?

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■馮小剛 (フォン・シャオガン) 監督とは? ■□■

私が馮小剛 (フォン・シャオガン) 監督の名前をはじめて知ったのは『ハッピー・フューネラル』(01年)。これを観たのは2003年12月10日だから、約5年前。その頃はまだ中国映画にそれほど詳しくなかったが、彼は「日本で有名な張藝謀 (チャンイーモウ)、陳凱歌 (チェンカイコー) 監督以上に、中国国民に愛されている監督で、彼の作品は毎年お正月映画となっており、いわば日本の『男はつらいよ』における山田洋次監督のような存在」と紹介した (『シネマルーム5』276頁参照)。また、これに続く『わが家の犬は世界一』(02年) も「ほんのりとしたムードの中、最後はハッピーエンドに」と紹介した (『シネマルーム17』304頁参照)。さらに、チベット鉄道の列車内という密閉空間で展開される、一匹狼のスリと窃盗集団そして警察官を含めた三つ巴の闘いの面白さと、性善説VS性悪説を考えさせる人生哲学をたっぷり含んだ『イノセントワールドー天下無

賊一』(04年)は最高傑作だった(『シネマルーム17』294頁参照)。

■お正月映画の顔から、世界的巨匠へ■

そんなフォン・シャオガン監督がそれまでの軽妙な作風をガラリと変え、章子怡(チャン・ツイイー)を主演に据えて挑んだのが「中国版ハムレット」である『女帝 エンペラー』(06年)。これは豪華絢爛たる時代絵巻と赤を基調とした映像美、そして壮絶な人間ドラマで見どころいっぱいだった(『シネマルーム17』298頁参照)が、これは明らかに世界進出を目論んだもの。

ところが、フォン・シャオガン監督の最新作『戦場のレクイエム』はさらに趣きをガラリと変え、わずか3頁の史実にもとづいた短編小説に注目し、人民解放軍兵士の感動の物語を描いたもの。この映画はある意味では中国の人民解放軍のプロパガンダともなるが、フォン・シャオガン監督の狙いはそうではなく、あくまで主人公谷子地(グー・ズーティ)(張涵予/チャン・ハンユー)の戦友たちの名誉回復に対する想いを描こうとしたもの。第17回金鶏百花映画祭で最優秀作品賞(『戦場のレクイエム』)、最優秀監督賞(フォン・シャオガン)、最優秀主演男優賞(チャン・ハンユー)、最優秀助演男優賞(ドン・チャオ)の4賞を獲得したのは、きっとそんな1人の兵士の生きざまが感動的に描かれたため。

そう考えると、1958年生まれのフォン・シャオガン監督は今やオールラウンド・プレイヤーとして、お正月映画の顔から世界的巨匠に羽ばたいたようだ。

■小道具の使い方と感動を呼ぶ組み立て方に感心！■

映画冒頭に印象的なシーンが登場する。それは、雪一面の中にある墓石の台の上に置かれた1本の進軍ラップ。これを上からクローズアップで捉えたカメラは次第に離れていき、墓石全体をそしてあたり一面を映し出していく。実は、これがこの映画のテーマ。つまり第9連隊が劉澤水(リウ・ゾーシュイ)団長(胡軍/フー・ジュン)から命じられた任務は、「旧炭鉱を正午まで守り切れ。そして、集合ラップを合図に随時撤収せよ」ということ。

印象的なシーンの後すぐに登場する華東地方での緊迫感と臨場感あふれる国民党軍との戦闘によって、指導員をはじめ多くの部下を失った第9連隊は、兵員の補充はされず武器だけの補充でその任務に向かうことに。たった一人加わったのは、戦闘中に失禁して処罰を受けていた元教師の王金存(ワン・ジンツン)(袁文康/ユエン・ウェンカン)。連隊長のグー・ズーティは、彼が文字を書けることを見込んで新しい指導員に任命したわけだ。

戦車を含む圧倒的に優勢な重火器と膨大な兵力で塹壕に立てこもるグー以下47名の兵士たちに襲いかかってくる国民党軍。その1次攻撃、2次攻撃の中、次々と戦友を失いながら第9連隊は塹壕を死守し続けたが、爆音がかたまると、集合ラップは鳴ったの？戦闘中に瀕死の大火傷を負った焦大鵬(ジャオ・ダーポン)小隊長(廖凡/リアオ・ファン)は「集合ラップの音を聞いた」と進言し、1部の部下たちもそれに同調するが、爆音で耳をやられたグーには聞こえていなかった。判断に迷ったグーがワン指導員に尋ねると、ワ

ン指導員ははっきりと「聞いていない」との答え。さあ、その結果第9連隊に訪れたその後の悲劇とは？リウ団長のラップ卒リアンズは団長の命令によって集合ラップを吹いたのだろうか？そんなテーマを描くについて、冒頭の印象的なラップの扱い方とそれがラストになって大きなドラマとなって感動を呼ぶ組み立て方に感心！



『戦場のレクイエム』発売中 発売元：ブロードメディア・スタジオ
販売元：ポニーキャニオン 価格：DVD¥3,800(本体)+税
(C) 2007 Huayi Brothers Media & Co., Ltd. Media Asia Films (BVI) Ltd. All Rights Reserved.

■□■迫真の戦闘シーンだが、1つの疑問点が■□■

プレスシートによると、この映画の製作費17億円は中国の戦争映画史上最高額。他方、約400万人を動員し、37億4000万円を突破した興行収入は中国歴代2位とのこと。しかして17億円の製作費の大半は①華東地方における第9連隊の市街戦、②淮河最前線での第9連隊全滅の戦い、で使われていることは明らかだ。

スティーブン・スピルバーグ監督の『プライベート・ライアン』（98年）は映画冒頭約20分間の迫力ある戦闘シーンにビックリした（『シネマルーム1』117頁参照）が、この映画もそれに劣らない迫真性タップリだから、それを十分に味わいたい。

もっとも私の目には機関銃の乱射ならともかく、瞬時に銃弾一発で敵の頭を射抜くシーンが続出するのは少し疑問。『山猫は眠らない』シリーズにおけるトム・ベレンジャー扮するトーマス・ベケットのように訓練された狙撃手（『シネマルーム3』128頁、『シネマルーム8』381頁参照）やライフルの五輪選手ならともかく、志願で入ってきた人民解放軍の兵士たちの多くがそんな技量をもっているとは、私には到底考えられないわけだ。

■□■朝鮮戦争の現場で面白い友情が■□■

この映画は中盤から大きく転調していく。すなわち、耳を負傷したまま敵兵の軍服を着て倒れていたグーは今病院に收容され、自分の所属部隊も名前も判明しないことに苛立っていた。そんな中「砲兵はいないか？」との呼びかけに手を挙げたため、グーは今度は趙二斗（チャオ・アルドウ）（鄧超／ドン・チャオ）の連隊に入ることに。

そして今、グーは突如勃発した朝鮮戦争にチャオの連隊の一員として参加していた。後日チャオはグーの弟分として、戦友の名誉回復のために奔走するグーを応援することになるのだが、この朝鮮戦争の現場で築かれるグーとチャオの友情は、いかにもフォン・シヤオガン監督好みの面白いもの。それについてはここでのネタばらしを避けるので、あなた自身の目でしっかり確認を。

■□■革命烈士？それとも失踪者？それが問題だ！■□■

西暦79年、イタリアではベスビオス火山が大噴火を起こし「ポンペイ最後の日」を迎えた。つまり火山の大噴火によって1つの都市が埋もれてしまったわけだ。またこれと同じように、第9連隊が国民党軍に対抗して全滅した淮河における激しい戦闘によって、旧炭鉱の地盤そのものが大きく変化してしまったのは当然。つまり、せっかくグーが戦死者たちを一カ所にまとめ、敵の手に渡らないよう最後にはワン指導員の手によって爆破させたあの地点は今やどこにあるのか全くわからなくなってしまったわけだ。

その結果、敵戦車3両の破壊を含む華々しい戦果をあげたあの激しい戦闘における47名の戦死者たちも、名誉の戦死と記録されることなく、失踪者扱いにされることに。これにはグーは怒り心頭だが、新国家建設後次第に官僚体質が強まってきた中国共産党支配下

の国ではそんなグーのアピールは門前払い。奮闘して名誉の戦死を遂げた戦友たちの名誉を回復し、革命烈士として名前を刻んでもらうために自分ができることは？今や、チャオを救うために行った「あの行為」によって片目を失ったグーはそう考えた挙げ句、たった一人で無謀とも思えるある行動に及ぶことに・・・。

■□■紅一点の印象度は？■□■

戦争映画の登場人物は男ばかりになりがちだが、この映画の紅一点は後半に登場するワン指導員の妻孫桂琴（スン・グイチン）（湯（女燕）／タン・ヤン）。淮河の戦場跡地で戦死した仲間たちが失踪者扱いされることに憤りを覚えていたグーは、ワンの行方を探しているスンの姿をみて、スンと共にチャオを訪れ、戦死者たちの行方を探す協力を求めることに。フォン・シャオガン監督は、製作費の関係かもしれないがこの映画には『イノセント・ワールド』におけるアンディ・ラウや『女帝 エンペラー』におけるチャン・ツイイーのような大物を起用せず、ほどほどの若手俳優のみを起用してリアルさを求めた。したがってスン・グイチンを演じたタン・ヤンも1983年生まれで中央戯劇学院を卒業したばかりの新人。出番はあまり多くないし、私の印象では「これは！」と思うほどの美人ではないが、さてあなたの印象度は？

■□■グーの執念は？■□■

新中国の建国後、チャオは人民解放軍の将校として順調に出世していた。それに対して、グーは片目を失った退役軍人として、47人の戦友たちの名誉回復に奔走しているだけの、どちらかというと後ろ向きの人生。ところが、そんなグーでも、チャオに対しては朝鮮戦争における、「あの事件」以来ずっと兄貴分の存在だ。そんな兄貴分グーの勧めによってチャオとスンがあっさり結婚してしまったのは意外な展開だが、それによってグーの活動に対するチャオの援助がより強力になっていくことに。一人、炭鉱の入口を探して石炭くずの山を掘り始めたグーが、作業中の炭鉱夫たちから迷惑がられたのは当然だが、それが見逃されたうえ、食事の差し入れまでされるようになったのは、明らかにチャオたちの支えによるもの。さあそんな支援の中、グーの戦友の遺体探しと名誉回復への執念は実るのだろうか？ラストの感動に向けて、あなたの興味はグングン高まっていくはずだ。

■□■一部否定的な感想も■□■

ラストには「1958年、淮河県の土木工事中に、埋もれていた第9連隊47人の遺体が発見された」との字幕が表示されるが、この映画のテーマや構想を理解しその展開を注意深く観ていけば、そんな結果は読めるはず。したがって、映画後半の「ハイライト」の第1はグーの願いが上層部に届き、第9連隊の淮河の闘いにおける戦死者47名が革命烈士として認められるシーン。そして第2は遺体が発見された後その奮戦ぶりが認められ、グーを含む全員に勲章が与えられるシーン。

たしかにこれはグーの執念が実った結果として訪れる感動的なシーンだが、ネット上には一部厳しい感想がある。それは「中国の政府や社会にとっては烈士だとか勲章だとかは重要なかもしれませんが、個人レベルで考えた時、それよりも戦争の虚しさや平和の尊さの方が大きいはずだし、そうであってほしいと思います。この人は部下のことだけ考えて、戦争で死んだ他の多くの人や、自分たちの殺した敵のことを考えられないのでしょうか。メンツと思給しか頭がないのだとしたら、美談でも何でもありません。」というもの。そんなにヒネくれて観なくてもいいのではないか、というのがヒネクレ者の私の見方。つまり、私は単純にグーの執念を認めてやりたいし、それを立派に演じ切ったチャン・ハンユーの演技力も高く評価したい。さて、あなたのご感想は・・・？

2008（平成20）年11月29日記

中国「内戦」の革命烈士秘話とは？

正月映画の顔として中国人に愛されているのが、比較的日本人なじみの薄い馮小剛監督。その作風は、テンポ良いリズムと軽妙なヒネリの中、庶民の善と人間への善意がいっぱい詰まり、「ハッピー・フューナール」(一年)、「わが家の大は世界」(二年)、「インセントワールド」天下無敵(三年)の面影は、まさに

中国の山田洋次監督！ 国民党を主演に迎えた「女帝 エンペラー」(九八年) 並みに雄しむ

に中国の山田洋次監督！ 国民党を主演に迎えた「女帝 エンペラー」(九八年) 並みに雄しむ

「戦場のレクイエム」
(千日前・数島シネポップほかで公開中)



© 2007 Huayi Brothers Media&Co., Ltd. Media Asia Films(BVI)Ltd. All Rights Reserved.

の秘話を採り王城野、苦難の末に重い口を開いた原隊の元兵士の衝撃の証言とは？

十月に建国六十周年を迎える胡錦濤政権。一見人民解放軍費とも見えるが、抗日戦争以来は余り知られていない国共内戦と朝鮮戦争に翻弄される人々の素顔と顔を涙監督は、見事な問題意識でじっくり捉えている。

敵の圧倒的な火力・兵力に玉碎覚悟で戦う中、ラッパ音はついに最後まで聞こえなかった。ラッパは鳴らされなかったのか？ それとも？

生き残った隊長の見たものは、遺体確認できない戦死者に対する連日兵隊の失業者扱い。なき返下の名言回復に奔走する彼を助けるのは、朝鮮戦争の前線一命を救われ弟分となる解放軍のエンジニア、趙二斗少佐と、戻らぬ覚悟を誓った大

大阪日日新聞 2009（平成21）年1月31日